

「予防医学のストラテジー 生活習慣病対策と健康増進」

The Strategy of Preventive Medicine

Geoffrey Rose 著

曾田 研二・田中 平三 監訳

水嶋 春朔・中山 健夫 訳

土田 賢一・伊藤 和江

岡山大学医学部教授・衛生学教室

青 山 英 康

公衆衛生従事者はもちろん、地域における保健と医療と福祉の連携強化に関心を持ち、かかわりを持つ医師や保健婦など、すべての保健と医療の各専門職にとって、最も熟読してもらいたい書物を手にしたように思う。その意味で、この書物を見つけ出し、わが国での訳書を刊行しようとする努力をされた訳者の水嶋春朔先生に感謝したいし、彼の試みを支えた共訳者と若手研究者を励まし、監訳をお引き受けになった曾田・田中両教授に敬意を表したい。複数の訳者の共同作業によるものの多くは訳者の能力の差が出て読みづらく、原書を読み直したくなるものだが、本書は全く読みやすく、確実に邦訳されており、原書の内容のすばらしさとともに訳書としてもすばらしい書物であり、初版とは信じられないでき栄である。

書名の関係で「予防医学」と表現されているが、公衆衛生学の永遠の命題である「個人と集団」、「健康と疾病」、そして「集中と分散」を極めてわかりやすく解説してくれており、公衆衛生学(以下、予防医学と同義語として使わせていただく)の教科書として最高級の内容となっている。

この書物の著者である Prof. Geoffrey Rose は公衆衛生学の第一級の研究者であると同時に最高の教育者であることは、この書物を読み通したときに確信が持てる。公衆衛生学の教育と研究一筋に過ごしてき

て、定年まで残り少なくなった筆者自身が今日になって得られた結論の1つに、「教育とは学生に疑問を持たせること」というのがある。この著書を読んでいて、決して解答は与えられていない。しかし、読み通していただければ、自然に読者自身が疑問を持ち、そして自らの解答を得ていることに驚かされるであろう。

「第1章：予防医学の目的」に始まって「第2章：何を予防したらよいのか」の中で、「予防医学の役割は命令することではない」と述べているように公衆衛生学の目的と概念、意義が確実に解説されており、「第3章：曝露リスクとの関係」では疫学概念と同時に「健康と疾病の連続性」という公衆衛生学の基礎理論を完全に理解させてもらえる。「第4章：個人レベルの予防とハイリスク・ストラテジー」では、「相対リスクは研究者のものであって、政策決定者には絶対リスクが決断のために必要」とか、「高いリスクのある個人のみを予防医学の対象とするハイリスク・ストラテジーには限界がある」など、リスク・コントロールを目的とする公衆衛生活動の利点と危険性を明確にさせてくれる。「第5章：個人と集団」、「第6章：集団が変化する実例」、そして「第7章：予防医学のポピュレーション・ストラテジー」によって、個人と集団へのアプローチの利点と危険性とともに、「集団全体を対象とした予防対

策は1人1人にはわずかな利益しか与えないが、集団全体には大きな利益をもたらす」ことをも理解させてもらえる。そして「第8章：健康を求めて」では「情報がすべて与えられているときのみ消費者に選択がある」というように、公衆衛生学と保健活動の命題に直面させてくれる。

これまでの保健活動が、とかく「良いことだから」という信念だけで、何の疑いも持たずに保健活動を強制してきた保健医療従事者にとってはショックであるかもしれない。しかし、今日、医学・医療の各分野で「evidence based medicine」の重要性が叫ばれているとき、公衆衛生学と保健活動の分野でも、日常業務の中での調査・研究活動を通して得た「evidence」に基づく保健活動の実践と展開の方策を、この書物はまさに手を取って教えてくれる。

成人病対策から生活習慣病対策への転換、地域保健法の制定による新しい地域保健活動の展開として「検診至上主義」から「生活指導重点主義」への転換など、「発想の転換—paradigm shift」が求められているとき、この書物は最高の指針と手引き書になると言える。

近來にまれな公衆衛生学の最高の教科書として、幅広く熟読されることを期待し、お勧めしたい。

● A5 頁170 図21 表9 1998
定価(本体2,900円+税) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)